



小説「安楽死特区」に託した思い

あなたはどんな最期を望みますか？

医学博士 長尾和宏

肥大化する安楽死願望

12月21日に出版された書籍「小説安楽死特区」(ブックマン社)に託した思いについて書きたい。

本書を書くかと思った動機はこうだ。近年、様々なメディアによる調査によると、一般市民の7〜8割が安楽死に賛成しているという。長生きしたいが、最期は潔くということだろうか。また昨年、神戸のある高校で高校生自身が行ったアンケートでも7割の高校生が「安楽死に賛成」と回答している。高齢者の医療介護費を若者世代は負担したくないという思いもあるのだろうか。空前の安楽死ブームとっていいだろう。なかには「安楽死の法制化を！」と声高に叫ぶ著名人もおられる。

でもちょっと待って、と私は言いたい。そもそも安楽死と尊厳死の区別はついていますか？以前、月刊文藝春秋を読んでいた「安楽死・尊厳死特集」というものがあった。100名の有識者に賛否を問うその論拠を読んだが、尊厳死と安楽死を混同している人が大半だった。両者の区別がついていると筆者が理解し

た有識者はたった3人であった。日本を代表する有識者の認識率が3%程度なら一般の方や高校生の理解はいかほどか。そんな状況の中、安楽死願望だけがなんとなく肥大化している現状に大きな違和感を覚える。そこで私はまず両者の違いを小説という形で描いてみようと思った。

尊厳死とリビングウイール

前号で述べたように「リビングウイール裁判」といわれる「リビングウイールの法制化」はまったく別物である。というか次元がまったく違う話

という声も頂いた。ならば「フィクション」という世界で何人かの登場人物を通じてその世界を表現してみたい。以前に書いた「抗がん剤10のやめどき」は小説仕立てだが、ノンフィクションが混じっていた。だから今回が「初めての本格小説」である。これまで書いてきた尊厳死エッセンスは今回の小説のモチーフだ。エンターテイメントであると同時に市民が終末期医療を理解する近道であらう。また同業の医療関係者にも読んで欲しい。読み手によって感想は様々だろうから「本書を読んで自由に語る会」みたいなものが病院や学校で開催されることが私の夢である。

この声も頂いた。ならば「フィクション」という世界で何人かの登場人物を通じてその世界を表現してみたい。以前に書いた「抗がん剤10のやめどき」は小説仕立てだが、ノンフィクションが混じっていた。だから今回が「初めての本格小説」である。これまで書いてきた尊厳死エッセンスは今回の小説のモチーフだ。エンターテイメントであると同時に市民が終末期医療を理解する近道であらう。また同業の医療関係者にも読んで欲しい。読み手によって感想は様々だろうから「本書を読んで自由に語る会」みたいなものが病院や学校で開催されることが私の夢である。

初の本格医療小説

これまで尊厳死関連の本を20冊くらい書いてきた。できるだけ分かり易く書いたつもりですが、概念的だ

これまで私が書いてきた本のなかでいちばん読んで欲しいのは間違いなくこの1冊である。振り返るとこの小説を書くために50歳代に何十冊もの実用書を書いてきたような気がする。

特区の設定には少々迷った。東京か大阪か、あるいは地方なのか。結局、特区は東京に設定した。しかし関西の場面も多く具体的な地名もたくさん出てくるなどかなりリアリティを意識した。安楽死を絵空事としてではなくできる限り現実的に描いたつもりだ。実は私らしき老人も登場する。

これまで私が書いてきた本のなかでいちばん読んで欲しいのは間違いなくこの1冊である。振り返るとこの小説を書くために50歳代に何十冊もの実用書を書いてきたような気がする。

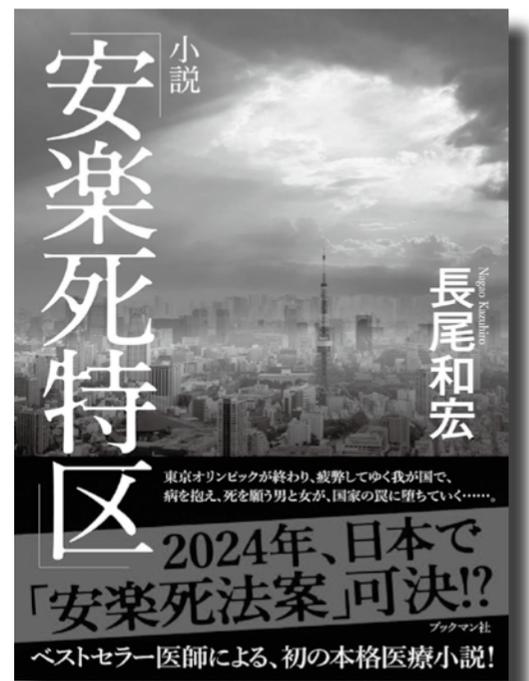


長尾和宏 (ながおかずひろ)

医療法人社団裕和会理事長、長尾クリニック院長

- 1984年 東京医科大学卒業、大阪大学第二内科入局
- 1991年 医学博士(大阪大学)授与
- 1995年 兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業、現在に至る
- 日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、全国在宅療養支援診療所連絡会世話人、関西国際大学客員教授
- [医学博士]
- 日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、指導医、日本在宅医学学会専門医、日本禁煙学会専門医、日本内科学会認定医、労働衛生コンサルタント

【著書】『平穏死・10の条件』(ブックマン社)、『抗がん剤・10のやめどき』『糖尿病と膵臓がん』(ブックマン社)『胃ろうという選択、しない選択』(セブン&アイ出版)『がんの花道』(小学館)『抗がん剤が効く人、効かない人』(PHP 研究所)『大病院信仰、どこまで続けますか』(主婦の友社)など。[医学書] スーパー総合医叢書・全10巻の総編集(中山書店)など多数。



小説「安楽死特区」